

途上国都市におけるスラムの機能

——スラムに関する対立議論をめぐって——

新津 晃 一

I 途上国の都市化とスラムの形成⁽¹⁾

産業革命の勃興以来、都市に、職を求め、出世の機会を求め、活気に満ちた都市文化への接触を求めて移動する人口の急増はきわめて普遍的な現象であった。また、こうした人口の向都移動が産業化を押し進める起動力ともなっていた。人口の急激な都市流入は時として、当該都市の既存の居住スペースを越えて脹れ上る。住宅需要の急増は必然的に家賃の急騰を来し、その結果、1人当りの居住スペースが縮小される。特に向都移動者のほとんどが、高い家賃を支払う能力のない人々であるところから、都市の下層住宅地区ではこの影響がもっとも顕著に現われる。これまですでにスラム化していた下層住宅地区は、さらに密集化と生活環境の悪化に拍車かけられる。一方、下層住宅地区にも居住することができない人々は郊外の空地などにバラックをつくる。いわゆる〈不法占拠住宅地区〉(squatter)である。本稿では、こうした都市にこれまで存在したスラムや急激に発生したスクォッターの両者を含めて、以下スラムとしてまとめ、議論を進めてゆきたい。ところで、先進工業国の都市の場合、向都移動人口は、産業の発展にともない、雇用労働力として吸収され、やがて都市内のしかるべき場所に居住することが可能となるところから、労働意欲のある向都移動者によって形成されたスラ

ムの出現は過渡的な現象と考えられてきた。ところが、途上国の都市の場合、先進国のこうした実態とはかなり異った様相を呈していることが知られている。

第二次世界大戦後、途上国の相次ぐ独立にともない途上国政府の産業化政策は、それまでの植民地体制下からの経済的自立をめざし、近代産業の育成に投資が集中した。こうした産業政策の進展にともない、途上国都市における向都移動人口が急増したことは、これまでの先進国の例から考えてもきわめて当然のことであった。ところが産業化の進展が当初の期待通りに進行しないにもかかわらず、人口の都市集中化現象は、いっこうに低下することなく伸び続けているのが途上国都市の現状である。人口増が産業化にともなう労働人口の吸収力以上に膨張する、いわゆる(過剰都市)(over-urbanization)⁽¹²⁾として知られるこの現象の発生理由として、途上国諸国の独立前後から特に顕著になってきた人口増があげられている。農村でも、都市でも、人口は急増しており、特に土地生産性許容限度を越える農村人口の増大は、農村の側からの〈押出し〉(push)として向都移動が生ずるものと説明されている。この現象は、先進工業国の場合のように、どちらかと言えば都市の側の労働力需要増にともなう〈引っ張り〉(pull)による人口増とは正反対の理由によるもので、途上国特有の現象とされている。

ところで、押し出された向都移動者の向かう先は〈首位都市〉(primate city)⁽¹³⁾と呼ばれる、かつて植民地時代、宗主国の本拠地が置かれ、独立後も国内の政治的、経済的、文化的支配の拠点である都市のスラム地区であり、また未利用地の不法占拠であることについては前述の先進国の場合と同様である。しかし、量的には、先進国の場合とは比較にならぬほど著しく、今や膨大な人口が〈首位都市〉のスラムに居住しており、しかも今なお増加の一途をたどっていると言われている。その結果、たとえばマニラのスラム人口は当市の人口の35%、カラチ33%、カルカッタ33%、ジャカルタ、クアラルンプールそれぞれ25%と言った具合に増大

してしまっているのである。⁽⁴⁾またこうした顕著な動向のもとで、スラムに関する特有な現地語が現われている。たとえば、インドネシアではカンポン(kampong)、インドではバステイー(bustees)⁽⁵⁾、ブラジルではファベラ(favelas)⁽⁶⁾、ペルーではバリアダ(barriadas)と言った具合である。行政当局もこのように急激に発展するスラムに対し、適切な対策がとれず、恐るべき密集状態のうえに、さらに汚物処理や排水の便が悪く、極度に不衛生な地区が都市内のスラムやスコッターに生じているのである。こうした膨大なスラムの存在は都市の経済発展のための産業基盤投資を阻害し、都市を政治的にも、社会的にも不安定化させるものと考えられてきたのである。

かくして途上国の都市化とそれにより形成されるスラムは以下のような特質を持つものとして整理されることとなる。

- (1) 途上国の都市化は、産業化の進展にともなう人口増という要因よりも、都市人口の自然増、及び農村から押し出されて、都市に流入する人口増によるところが大きい。
- (2) 産業化による人口吸収力を越える都市人口の増大は途上国都市に固有の現象であり、〈過剰都市化〉(over-urbanization)と呼ばれる。
- (3) 途上国の都市の場合、産業化のための経済投資が、〈首位都市〉(primate city)に集中したため、またその結果として、小都市や中都市が未発達なため、過剰都市化現象は〈首位都市〉に顕在化する。
- (4) 農村人口の都市への大量移動により都市は農村化⁽⁷⁾、都市的生活様式としてのアーバニズムの進展はさまたげられ、人口増だけが先行する形態で都市化が進展する。
- (5) 過剰化した都市人口は、膨大なスラムを形成し、都市の経済的、政治的、社会的発展を阻害し、そのため都市自体が全体社会の発展のための触媒機能(catalyst)を果し得ず、むしろ〈癌〉(cancer)となっている。⁽⁹⁾

以上のような一般的見解(主に先進国側の研究者による)に対し、途上

国の研究者を中心としてかような見解の妥当性について以下のような疑問が提出されている。

- (1) 途上国の都市化は〈過剰都市化〉と言われるが、農村も同様に過剰人口をかかえており、都市だけ取りあげて〈過剰〉と指摘するのはおかしい。¹¹⁸
- (2) 農村からの〈押し出し〉による向都移動と言われるが、〈引っ張り〉要因によるところも大きく、また一般的に〈押し出し〉と言う際には、経済的にもっとも困窮化した人々が想定されるが、そうした人々の〈押し出し〉はむしろ少ない。¹¹⁹
- (3) 〈首位都市〉への投資の集中は中小都市の発展をおくらせるかもしれないが、少ない資本の国内全土への分散的投資よりも有効なのではないか。¹²⁰
- (4) 膨大なスラム人口の存在は過渡的なものであり、またスラムの存在が都市を政治的、社会的に不安定化させるという事実はない。¹²¹さらに経済的には、安価で大量の労働力を提供することにより、経済的発展の基盤となっている。¹²²
- (5) 以上の帰結として、途上国都市のスラムは国家の発展にとって〈癌〉になっているどころか、むしろ全体社会の発展に貢献している点さえある。¹²³

途上国の都市化に関する上記のような基本的な〈対立議論〉が背景となり、スラムについても全く異った見解が導き出されることになるのである。前者の説はスラムの存在を否定的にとらえているのに対し、後者の説は、肯定的ないしは、肯定的側面も大いにあることを指摘している。論点をより明確化するために、両者の説を単純化してみると次のようにまとめることが可能であろう。

(A) 〈スラム否定説〉

“途上国のスラムはその形成自体、〈過剰都市化〉の結果として偏倚的に発展したものであり、当然のことながら健全な産業化を阻害し、

全体社会を不安定化する要因となっている。”

(B) 〈スラム肯定説〉

“途上国のスラムの形成は決して偏倚的な現象とは言えない。偏倚的と見るのは西欧の都市化をモデルとして考えるからである。また、形成されたスラム自体についても、むしろ全体社会の発展に貢献している。”

本稿のねらいは、途上国都市のスラムに関する上記の〈対立議論〉の妥当性を検討しつつ、スラムが途上国の発展と統合にいかなる機能を有しているかについて考察することにある。次章ではまず、議論の前提となるスラムの概念を明確化し、さらにスラムを機能的に論ずる上で関連するスラムの類型を整理しておきたい。

II スラムの概念と類型

語源的に見ると〈スラム〉という用語は、〈眠り〉、〈まどろみ〉を意味する英語の“スランパー”(slumber)に由来すると言われる。⁴⁶したがって本来スラムとはあまり多くの人々には知られていない裏町や小路のようなところであり、眠ったように、静かな場所を意味していたようである。かつてヨーロッパの下層住宅地区は、こうした特質を有していたのかもしれない。時代の流れとともに、しかしながら、貧困な地区と言った意味あい次第に強く〈スラム〉という言葉に付着してきたことは、ウェブスター英語辞典の古い版をさかのぼってみても明らかである。⁴⁷

それでは、近年においては、いかなる意味での使用のされ方が一般的なのだろうか。以下、一、二、のもっとも代表的な定義を列記してみよう。

- (1) 「スラムとは、居住者の健康、安全、道徳、福祉等が阻害されるほど住宅が荒廃し、低質化し、不衛生化している居住地域である。」
(Ford, J.: 1936)⁴⁸

- (2) 「(スラムとは)……密集化し、老朽化し、不衛生化し、あるいは

必要公共施設やアメニティの欠除などの問題をかかえた、一戸の建物、建物群、又は地域であり、またこうした環境のゆえに当該地域の住民やコミュニティの健康、安全、道徳等がおびやかされているところである。」(国連：1952)¹⁹

これら二つの定義から明らかなことは、①スラムとは基本的に物理的環境を意味する用語であること、②物理的環境が直接的に意識や行動を規定する結果になること、等が意味されていることである。クリナード(Clinard, M.B.)はこの点に関連して次のように述べている。「われわれはスラムの貧困さだけが犯罪などのスラムの問題をつくり出すとは結論できない。経済的に困窮している人々が盗みを働くとは限らない。むしろ、そのような行動を許容し、賞賛さえする規範が、そうした環境に見出され、しかも個人の生活構造に取り込まれているかどうかということが問題となるのである。」²⁰上記のクリナードの論点は“経済的基盤だけが意識や行動を規定するとは言えないこと”を意味しているが、この論理を発展させれば、物理的環境のみからスラム問題が発生するわけではなく、また住宅事情が犯罪や逸脱行動をおこすわけではないということになる。したがって、「スラムは、物理的環境の所産ではない。それは社会的な生活様式(social way of life)の所産なのである」ということになる。²¹この考え方は、スラムの生活様式を〈貧困の文化〉(culture of poverty)とみるオスカー・ルイス(Oscar Lewis)の考え方と軌を一にするものと考えることができる。〈貧困の文化〉とはルイスによれば、貧困な生活を脱することが可能な好機が訪れても、そこから抜け出す努力をすることができない程、無気力な状態が、生活様式化している状況を意味している。²²こうした文化のもとで育てられた子供達は、不安定で、しばしば暴力的な家族生活を経験し、ほとんど教育を受ける機会もなく、しかも不法な仕事に従事させられる。〈貧困の文化〉はかくして世代から世代へと、こうしたゆがんだ生活様式を強化しつつ伝達するのである。ルイスが〈貧困の文化〉という分析概念を提出する基礎となったの

は、メキシコシティ、サンジュアン、プエルトリコ、ニューヨーク等のスラムの調査であったが、特に、〈貧困の文化〉が顕著にあらわれるのは、途上国で、しかも急激な都市化が進展するにもかかわらず、産業化による雇用の創出がおこなわれている都市であると述べている。また都市の中で次々に訪れる困難な問題に直面するに際して、ささえる強力な階級的基盤や出身民族集団に同一化できない人々に〈貧困の文化〉は特に適合することを強調する。

このようにスラム住民に共有化され、世代から世代へと受け継がれる〈貧困の文化〉に対し、途上国の研究者によるスラムの研究には、こうした悲観的な結論は見出しにくい。急激に増大した向都移動人口は大スラムを形成しているが、まだ世代から世代へと受け継がれるほどの歴史もへていないし、無気力どころか、仕事になりそうなことなら、すぐさまとりかかると活力を持っている人々であることが強調されている。しかもきわめて、緊密で、相互扶助的な生活様式がスラムには形成されていることが報告されているのである。

ストークス(Stokes, Charles)のスラム研究は、これら二つの異ったスラム観が存在するのは実際にかような二類型のスラムが存在しているからであることを示唆している²⁰。すなわち〈希望のスラム〉(slums of hope)と〈絶望のスラム〉(slums of despair)の存在である。〈希望のスラム〉とはここに住む居住者の多くが、当該地を過渡的な居住地(a way station)と考えていることである。結果的にはかなり長期にわたって住みつくことになったとしても、やがてはここを出てゆこうとする意図をもっている。彼等は都市の住民として都市の社会生活、経済生活にいまだ、どっぷりつかっているわけではなく、疎外された状況にあるが、いつの日にか正統な権利と義務を有する市民として都市生活を享受することになると信じているのである。したがって、十分、雇用されるに値する(employable)、労働意欲をもった人々である。これに対し、〈絶望のスラム〉とはここに住む居住者の多くが、当該地を最終地と考え、ここから

出て行ける場所は他にないと考えていることである。いわば社会的に落こぼれた人々 (social residue) であり、望みを失い、あきらめている人々である。すなわち、老人、貧困者、日陰者、売春婦などの居住地となっている。ここから抜け出す人はいないが、ここに入ってくる人は常にいるといった性格を持つスラムである。

ストークスの分類の他、ガンス (Gans, Herbert) の〈流入地〉 (entry area)、〈都市の混迷地〉 (urban jungle) のスラム分類²⁵、フランケンホフ (Frankenhoff, Charles) の〈開かれたスラム〉 (“open end” slums)、〈袋小路のスラム〉 (“dead end” slums) の分類²⁶、あるいはシーレイ (Seeley, John R.) の〈一時的スラム〉 (temporary slums)、〈永続的スラム〉 (permanent slums) の分類²⁷もほとんど近似な二類型と見なすことができよう。またラキヤン (Laquian, Aprodicio A.) は、こうした二類型のスラムの形成が時間的にも立地的にも異なる傾向があることに着目している。すなわち前者のタイプのスラムが主に近年、都市の周辺部に形成されたのに対し、後者のタイプのスラムは古くから都市の中心部に形成されていたことを指摘している²⁸。

以上の議論を簡単に整理してみると以下のごとくになるう。

- (1) スラムとはごく一般的には健全な居住に適さない程、住環境が悪化した地区のことである。
- (2) スラムが社会問題として取りあげられるのは、住環境の悪化それ自身もさることながら、そこで形成される〈生活様式〉の問題である。
- (3) ただし、住環境の悪化は常に〈生活様式〉の悪化に結びつくとはかぎらない。
- (4) 以上の帰結として〈物理的環境としてのスラム〉と〈生活様式としてのスラム〉は分けて考えることが妥当である。特に社会学的にスラムをあつかう際には〈生活様式としてのスラム〉の側面が問題となる。
- (5) 〈生活様式としてのスラム〉については〈貧困の文化〉に代表されるような悲観論と、スラムを都市適応のための過渡的な生活の場と

見る楽観論とがある。

- (6) スラムについて、このような相異った二つの説が存在するのは、二つの異ったタイプのスラムが存在するからである。したがって、スラムの性格を二者択一のものと考えること自体、妥当な考え方とはいえない。

以上、この章では、〈スラム内部における生活様式〉について、悲観論と楽観論による〈対立議論〉の存在を指摘すると同時に、両類型のスラムが実体として存在するという立場を示す〈両立議論〉の存在を明らかにした。特に〈スラムの生活様式〉に関する〈対立議論〉は当然のことながら前章における〈スラムの外部社会への機能〉に関する否定説、肯定説の〈対立議論〉と密接な関連を持っていると考えることができよう。すなわち、

- (1) 個人を無気力化し、健全な労働意欲を喪失させる〈生活様式としてのスラム〉の拡大は、都市の産業化を阻害し、全体社会を不安定化させる要因となるであろう。(悲観論→否定説)
- (2) 他方、個人の都市適応を助ける装置となる〈生活様式としてのスラム〉の拡大は、安価で大量の労働力を提供することになり、全体社会の発展に貢献することとなる。 (楽観論→肯定説)
- (3) ただし、こうした関係は常に斉一的であるわけではなく、多くの場合こうした傾向にあるということを意味するものである。したがって、無気力化した人々を受け入れることにより、全体社会の統合に役立つといった〈悲観論→肯定説〉といった場合もあるし、又、〈楽観論→否定説〉といった場合もある。
- (4) また、(1)(2)の議論は、二者択一的な対立議論ではなく、こうした二つの異った性格のスラムが並存しているというように発展的に考えることが妥当であろう。〈対立議論〉に比較し、〈両立議論〉又は〈類型論〉は実態理解上、より妥当性を持つと思われる。

しかし、類型論の基本的な考え方は、全く性格を異にする二つの型のスラムが都市に実在することを示唆するものである。ところが、多くの

調査報告書からは、この二つのスラムの特質が、一つのスラムの中に並存していることがうかがわれる。したがって、この二つのスラムの性格を、いかなるスラムにも存在する二つの〈機能〉と考えることの方がより妥当性を持つものと思われる。すなわち個人を無気力化させ、全体社会の統合を阻害する〈逆機能〉の側面と、個人の都市適応を助け、全体社会の統合と発展に貢献する〈順機能〉の側面がスラムにはあると考えることが妥当であろう。すなわち〈悲観論〉としてのスラムは、スラム内の生活様式に関する逆機能的側面に注目した議論であり、〈否定説〉としてのスラムは、スラムの外部社会への逆機能的側面に注目した議論であったわけである。他方、〈楽観論〉としてのスラムは、スラム内の生活様式の順機能的側面に注目した議論であり、〈肯定説〉としてのスラムは、スラムの外部社会への順機能的側面に注目した議論だったわけである。上記の関連はしたがって以下のように図式的に整理することが可能である。

図1 途上国のスラムに関する対立議論

	スラム内部の生活様式	スラムの外部社会への関連
逆機能	悲観論 (居住者の生活様式を無気力化させてしまう場とみる)	否定論 (全体社会の発展・統合を阻害する場所とみる)
順機能	楽観論 (居住者の生活様式を都市適応的に変えてゆく場とみる)	肯定論 (全体社会の発展・統合に貢献する場所とみる)

以下、次章においては途上国のスラムを〈逆機能的側面〉と〈順機能的側面〉から整理し、スラムが途上国の発展と統合にいかなる意味を有する存在なのかについて明らかにしてゆきたい。

Ⅲ 途上国におけるスラムの機能

スラムが必ずしも“都市の吹き溜り”を意味するわけではないことについては既に述べてきた通りである。しかしながら〈過渡的なスラム〉にして、〈永続的なスラム〉にして、スラムとは居住者や、流入者にとっていかなる役割を有し、またスラムの存在自体、外部社会に対していかなる機能をはたしているのだろうか。ここでは、スラムの機能を以下、逆機能と順機能とに分けて考察してゆきたい。

1 逆機能としてのスラム

スラムの逆機能的側面については、①生活様式としてのスラムが居住者や流入者を無気力化し、“ダメ”な存在にしてしまう側面(スラム内部への逆機能)と、②スラムが全体社会や都市の発展に阻害的に機能する側面(スラム外部への逆機能)とに分けて検討する必要がある。

1) スラム内部への逆機能：住民を無気力化させてしまうメカニズム

すでに述べたオスカー・ルイス(Lewis, Oscar)の〈貧困の文化〉に関する叙述はスラム内部の逆機能的側面をもっとも明解に分析している代表的な研究である。経済的困窮を主な原因としてスラムに住みついた住民や、この地区で生まれ育った人々は、やがてスラム住民に共有化され、受継がれてきた〈貧困の文化〉に巻き込まれ、育まれてゆく。努力をしても思うようにならない生活実態から、生活態度は無責任になり、自己卑下のイメージを持つようになり、酒におぼれ、妻子を顧みないといったように健全な市民としては不適応な行動様式をもった個人が作り出されてしまう。その結果劣等感が強く、依存的で、無気力で、弱い自我構造を有し、自制心を欠き、現時点の欲求を制御し未来のために備えようとする意識はほとんどなく、諦観と宿命感が支配的な性格が形成される。またごく身近な地域にしか関心をもたず、歴史的な視野などはほとんどなく、個人的トラブルやその日、その日の生活にしか関心を持たず、政治的にもアパシーな態度が育まれていくのである。当然の帰結とし

て個人ばかりか、その基本的なささえである家庭さえも解体に導びかれていく。家庭では父親は暴力的でしかも役割意識を欠く存在であるところから、母子家庭の環境になる。また、南米のカトリックが支配的な国では、離婚ができなくなってしまうのを恐れて、正式に結婚せず、未婚の妻が増えている例すらある⁵⁹。こうした家庭の下では子供は教育どころか、不正な仕事の手伝いすら強制され、社会からも除け者にされているという意識が植えつけられ、次第に破滅的な自我が形成されるといった悪循環を重ねることになる。このように、逆機能的な面が優位するスラムに対し、〈絶望的スラム〉とか〈袋小路のスラム〉といった指摘がなされたわけである。

ルイスは、このような精神的解体の過程をたどる都市流入者の多くは、農村にいる時から、土地もない貧農層であり、すでに解体への基盤ができていたことを指摘している。またスラム定着者の類型としては、その他、すでに述べたようにスラムで生れ育つうちに貧困の文化に染ってしまった人々や、当初は一時的にスラムに身を置くつもりが長期化し、次第にスラムの生活様式に巻き込まれてしまった人々なども挙げられよう。

なお、都市の経済的にきびしい生活環境の中で生き抜いてゆくためには相互扶助的結束が必要とされるため、同郷出身者や同一民族集団別にスラムが形成されることが多い。こうした状況の下ではさらに結束を強化するため、時として農村で生活していた時以上に伝統的な儀礼や習慣が重視される傾向にある。農村との行き来も活発であるため、都市的生活様式が身につかず、都市に居住しているながら、意識や態度の面における近代化は阻害されることになるのである。このように多くのスラムでは、無気力な人々の集まりであるにもかかわらず、近隣関係においては相互扶助的関係が存在していることが報告されているが、さらに〈貧困の文化〉が浸透したスラムでは、そうした関係さえ薄れ、相互不信で、敵対的な関係が強くなっていくことが明らかにされている⁵⁹。

以上のごとく、スラムに住みつ়くことは、個人を全ゆる意味において

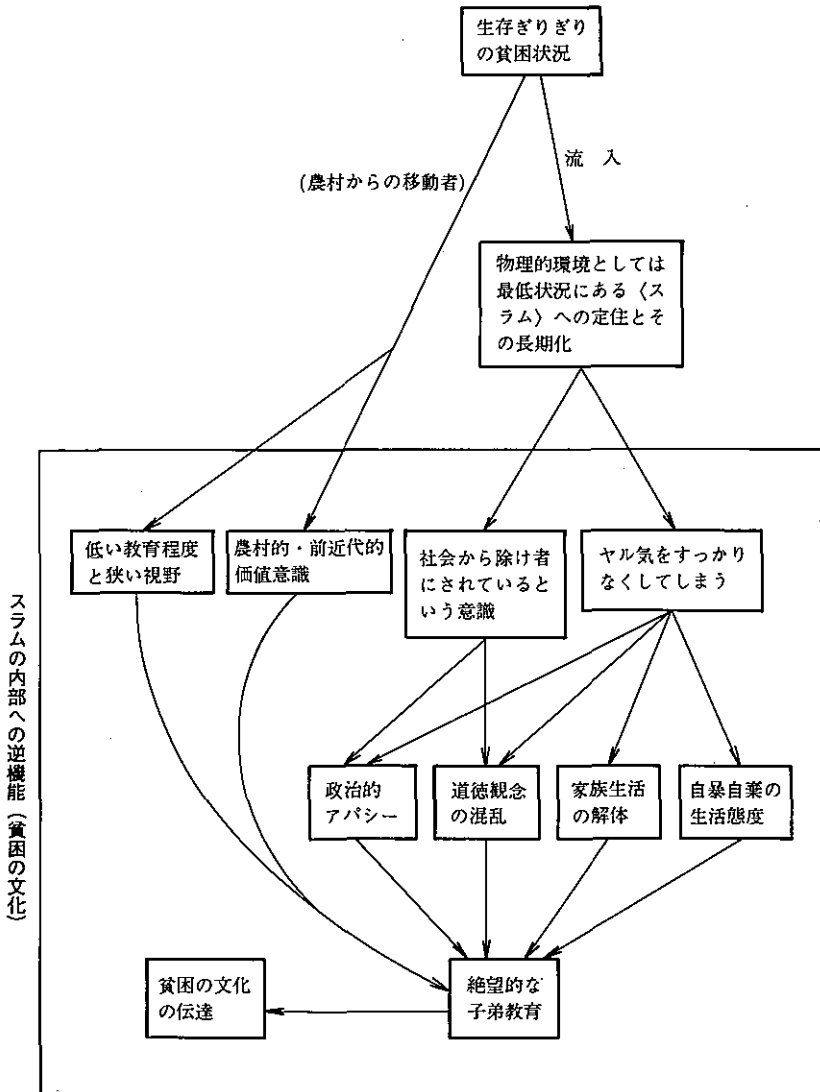
“ダメ”にしてしまう側面を有するのである。もちろんこうした状況に追い込まれてゆく基本的な背景には経済的な貧困状態があり、それがそもそもスラムという物理的にもすさまじい生活環境に住むことを余儀無くさせ、ついには、貧困の文化に巻き込まれ、さらにその生活様式が、一層の経済的貧困へと追いやるといふ悪循環のサイクルを形成しているのである。この過程を図式化すると図2のごとくなるであろう。

2)スラム外部への逆機能:全体社会の発展や統合を阻害するメカニズム
無気力で、意欲を喪失し、しかも反社会的な行動に走る人々の集まりとなるスラムは、必然的に無頼の徒や犯罪者の隠れ住む場所ともなる。このようにして、スラムは社会的にマージナルな不満分子の集住の場となり、公権力の及ばない無法地帯となる。したがってスラムの拡大は都市全体の安全性と秩序の維持を脅やかす存在となり、さらには全体社会の不安定要因ともなる。

また経済的にきびしい生活環境の中で生き抜いてゆくため、同一民族集団が都市内で、それぞれ結束し、孤立化してしまう傾向にあるが、かような状況のもとでは、政治意識の同一性やイデオロギーの同一性による政治結社が組織化されることもなく、国民統合の基盤が形成されにくい。N. K. ボース(Bose, N. K.)は途上国都市におけるこうした実態について、〈未成熟の都市化〉(premature urbanization)と称している。⁴³

マッギー(McGee, T. G.)はスラムを中心として形成される〈バザール型経済〉(bazaar-type economy)が近代的企業資本によってささえられる〈企業型経済〉(firm-type economy)に対し阻害的に働いていることを指摘している。⁴⁴すなわち後者の資本がしばしばステータス・シンボル(status symbol)として雇用されたり、温情的観点から雇われる多くのサーバントや下男といった、いわば寄生的な労働力によって前者の経済へと吸いとられてしまい、一国の経済成長の担手となる〈企業型経済〉の発展のための資本形成を阻害してしまう結果となることを指摘している。⁴⁵この場合、スラムが労働意欲のある住民の保持・育成に貢献する順機能

図2 途上国スラムの内部住民への逆機能



的役割を果たしたとしても、都市の人口が雇用量に対して過剰な場合、〈企業型経済〉の資本形成を阻害してしまうことは明らかである。このように、スラムを中心とする〈パザール型経済〉が優位する都市では、伝統的な社会構造が温存、強化され、近代化への社会変動は起きにくいとされている。また、通常スラムの住民は無気力化⁶⁸してしまっているため、〈規律ある労働者〉(disciplined worker)とはなり得ず、もちろんその育成をも阻み都市における産業化の進展を阻害することになる。

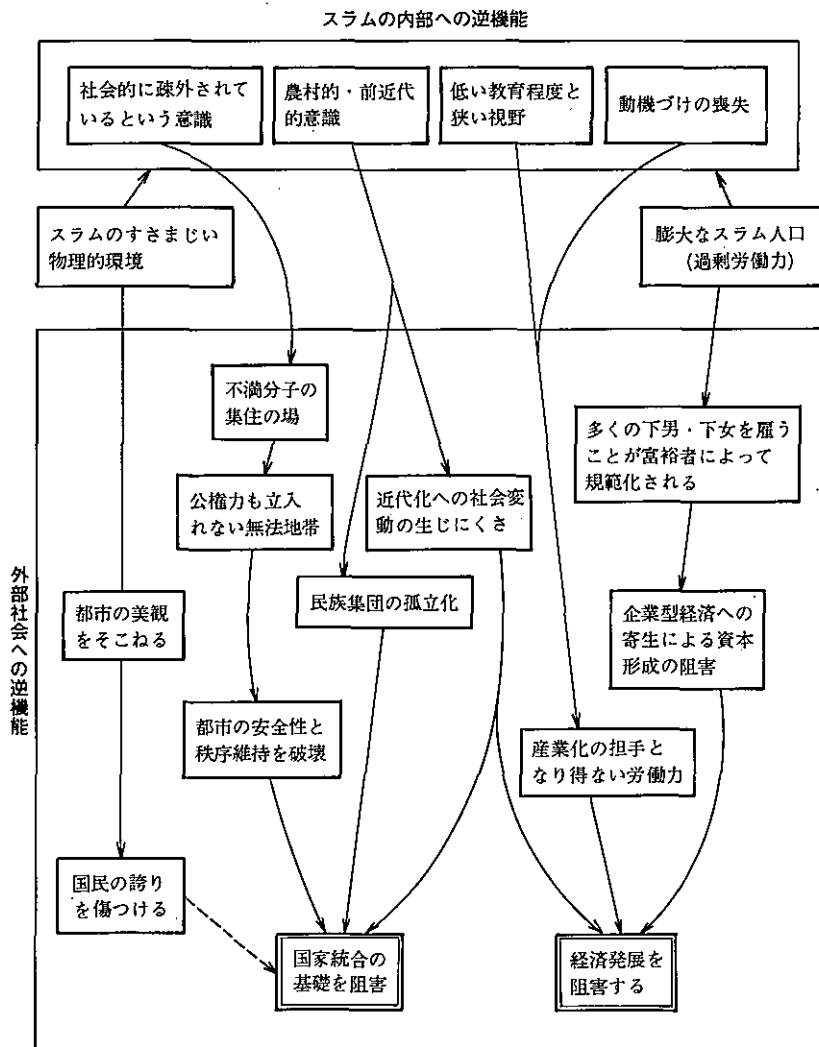
その他、スラムの存在が国民統合のシンボルとしての首位都市の美観をそこね、国民の誇りを傷つけることなども逆機能的側面として指摘されよう。

以上に述べた外部社会への逆機能的側面は、図3のように整理されよう。

また、途上国スラムの逆機能的側面を総括的にまとめてみると、以下のごとくになる。

- (1) スラムの逆機能的な生活様式にまき込まれてゆく人々は、それが外部からの流入者であろうと、スラム内で生育した者であろうと、基本的には経済的極貧状態にあることである。しかも何等かの理由により、当該スラムに居住するほか、他によりよき生活の場がない人人である。
- (2) こうした状況の下でもなお、将来に希望を持ち意欲的に又道徳的に生きようとする意思を持ちつづけることも不可能ではない。しかし、大した仕事もなく極貧状態の中で生き抜くための手段として、物乞いをし、ゴミ箱をあさり、盗みも働くと言った状況の中で、次第に都市一般に望ましいとされる生活規範から逸脱してゆく。しかも周囲の人々もそうした生活を共有しているため、逸脱行動は、スラム・コミュニティの規範として正統化され、強化されるようにさえなる。“ヤル気”をすっかりなくし、社会から除け者にされているという意識はこうして形成されるのである。

図3 途上国スラムの外部社会への逆機能



- (3) また、スラム居住者の多くが農村からの移動者であるため、極貧状況の中で同郷出身者が集住し相互扶助的に生き抜くことが必要になってくる。このような状況の下では、結束を高めるために、農村で生活していた時以上に農村的な儀式や生活慣習が維持・強化される傾向がある。こうして、近代的価値意識を持った都市的パーソナリティの形成を阻害してしまう。
- (4) 以上のようなスラムの逆機能的な生活様式は途上国都市や国家全体の発展・統合にとっても逆機能となる。すなわち、①産業化の担手となり得る労働者の形成を阻害し、②不満分子の集住による都市の秩序維持を阻害するからである。
- (5) その他、スラムの膨大な過剰労働人口は、〈バザール型経済〉形成の原因となり、〈企業型経済〉に対して寄生的な存在となる。かくしてスラムは経済発展の阻害因となるのである。ただし、スラム人口の増大は、スラム自身の側に原因があるのではなく、むしろ、途上国の工業政策、人口政策等の問題の“しわ寄せ”と見るのが妥当であろう。

2 順機能としてのスラム

スラムの順機能的側面についても逆機能の場合と同様、①生活様式としてのスラムが、都市適応を助けるメカニズム(スラム内部への順機能)と②スラムが全体社会や都市の発展に積極的に機能する側面(スラム外部への順機能)とに分けて検討してみることとする。

1) スラム内部への順機能：都市適応を助けるメカニズム

ホートン(Howton, F. W.) は発展途上国都市のスラムについて次のように述べている。「スラムは都市流入者にとって、社会的上昇移動のための仮の場である。これこそスラムの主要な機能である。……これといった財産も能力も持っていない流入者にとって、スラムは都市内の他のどの場所よりも、彼が必要とする生活の仕方と生活の糧を得るための

機会を提供してくれる。⁶⁷すなわちスラムとは都市流入者が正統な権利と義務を有する市民として都市生活に参加することを可能にする“適応のための訓練の場”であり、また“媒介装置”であることが強調されている。農村とは隔絶した社会環境にある都市に移動する流入者が強い心理的疎外感や孤立感を持つことなく都市の生活や職場へ徐々に適応できる社会的装置となると同時に〈農村—都市文化触変〉(rural-urban acculturation) ⁶⁸が円滑に行なわれる拠点としての機能をはたすことになる。農村出身者にとって都市のスラム内で生活しているかぎり、都市的衝撃は最少限にすまることが可能になり、外部の都市的状况への参与は選択的に行うことが可能になるのである。

多くの農村出身者にとって都市生活への適応は、まず比較的近親者の庇護を受け易い“仕事の場”へ吸収されることによって始まる。⁶⁹そこでの人間関係は、当該個人にとってすでにこれまで何度か出会ったことのある親族、あるいは同郷出身者であるため、農村にくらしていた時と全く同じ言語、習慣が通じ、インフォーマルな関係の下に仕事の場における行動様式を学習することが可能である。仕事の場は多くの場合、居住地と同一であるため、インフォーマルな傾向はさらに強められ、親密な社会関係にささえられつつ、農業とは異った仕事の場の論理を学習してゆく。その論理とは、①季節や天候に関係なく長時間働かなくてはならないこと、②農村よりも個人の能力や努力が直接“成功”にはねかえってくること、③成功の尺度は経済的価値が優先すること、などである。いわゆるバザール型経済の中の特に近親者に囲まれた仕事の場であっても、この程度の最低限の都市的行動様式は要求される。

このようにして、向都移動者は、都市内の緊密な同郷・近親集団からなるスラムを都市の中の“基地”としてさらに好条件の職場を求めて工場労働者やオフィスの勤労者になったり、あるいはバザールから出て、都心に近い場所に店舗を求め、より都市的状况に参加してゆく。職場をスラムやバザール地区以外に求めることは、これまでとは異って、かなり

異質な人間関係の場に参加することを意味する。そこでは同郷出身者は比較的に少くなり⁴⁰、言語、生活慣習、人種なども異った背景の人々と接することになる。この段階においても、彼等にとって適応のささえとなるのは、都市の中の“基地”、スラムである。職場から要求される役割や規範は、その場だけの〈使い分け〉として割切れれば、居住地ではこれまで通りの行動を受け入れてくれる同郷出身者や親族がいるのである。このようにスラムは都市流入者に対し、“仕事の場”を与え、“仕事のための訓練の場”となり、また〈心理的・社会的適応装置〉となっているのである。

こうした様々な機能に加えて、スラムは市民としての〈政治的・社会的訓練の場〉ともなっている。すなわち安全上、消防隊や自警団が自然発生的に組織化されたり、またスラム・クリアランスに設えて、様々な院外活動が行なわれるようになるからである。このような活動を通じてスラム住民は、地域の問題に関心を持つようになり、またそうする義務があることを認識し、他の人々と結束する必要があることを理解するのである⁴¹。

以上の帰結として、スラムは住民にとってはきわめて、安全で、有効な場と理解されている。ラキヤン(Laquian, A. A.)はこの点について次のように述べている。「一般的な観察とは矛盾しているにもかかわらず、居住者はきわめてもっともな説明を行っている。この地区はほとんどの人々にとって平和な地区であり、トラブルはギャング集団間の問題であり、それにまき込まれなければ何事もない。子供達にとっても、クルマが入り込んでくるわけでもなく、また常に親類縁者や隣人達が見はっているのできわめて安全である。常に全員が在宅しているわけでもないところから居住地は密集状態にあるとはいえない。その上、相互扶助的な友人、隣人に囲まれているところから、親しみと気楽さに満ちた環境にある⁴²。」ちなみにこの地区はマニラ警察署が、“問題地区”としてマークしていた地区で、ギャングの争いや殺人事件で新聞をにぎわせていた場所であった。しかも一年中、水はけが悪く、遊び場もなく、犯罪者や

売春婦が住みついている場所でもあった。

安全で快適な場所であると同時に、スラムは農村から出てきた貧しい人々が安上りに生活することができる唯一の場所である。買い物は、食パン1切れ、粉ミルク1オンス・カップ1杯、タバコも1本、というように少量買いが可能である⁴⁹。どうしても金がない場合は信用買いも可能である。もちろん親類縁者がごく身近に居住しているので、様々な経済的援助も期待できる。このようにして経済的に困窮していても、なんとかやってゆけるシステムがスラムには内在化しているのである。

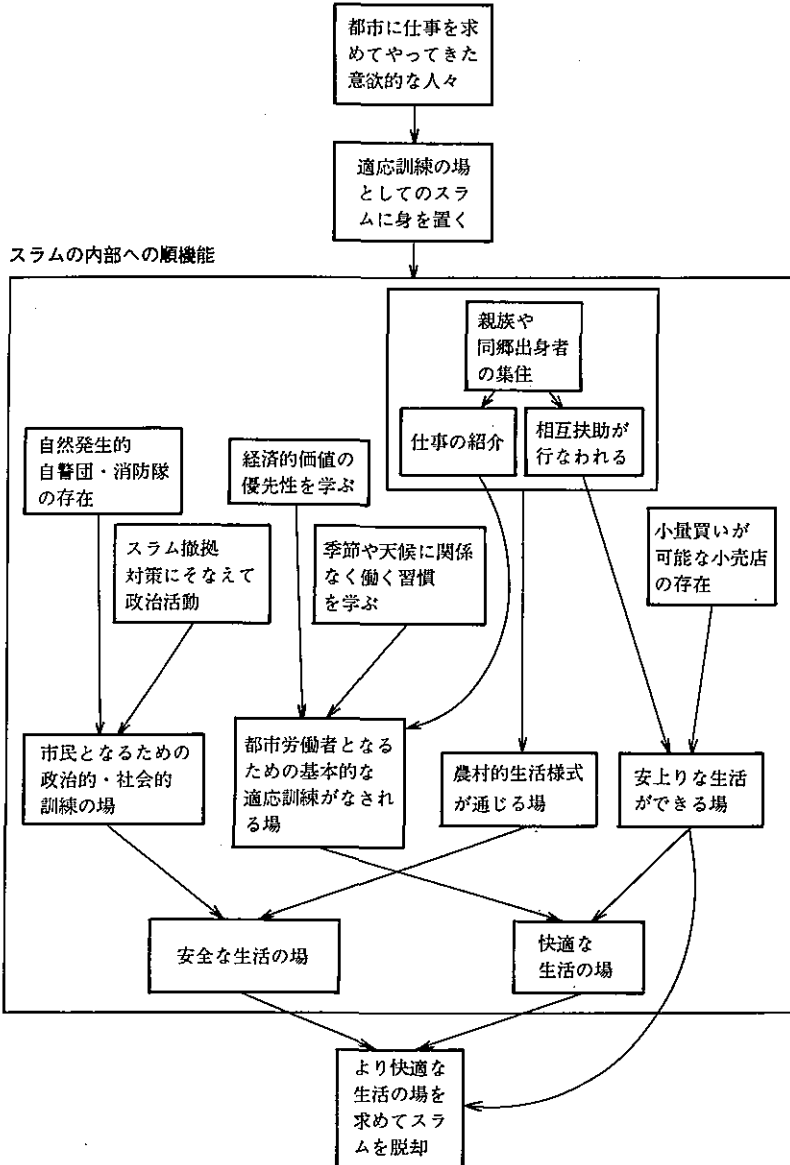
もちろんこうした適応訓練のための諸システムがあるにもかかわらず、うまく利用できず、スラム外へ出てゆくことができない人々もいる。この場合であっても住民は自分はダメでも子供の代にはここを出てゆけることを期待しているのである⁴⁹。

以上のような途上国スラムの生活様式が内部住民を活性化させ、都市適応を助けるメカニズムを図に示すと図4のごとくになる。

2) スラム外部への順機能

既述のごとく、向都移動者は働く意欲のある人々であり、しかもスラムの中で雇用にたえうる労働者として基礎的適応のための訓練さえ受ける。このように意欲のある人々の大量の都市流入は、都市を安価な労働提供の場とし、産業投資を刺激することから、産業をおこしやすい環境となることが指摘されている⁴⁹。事実、労働者としては低い地位にはあるものの、都心部の企業や市役所で働いている人々もかなりおり、十分にこたえうる労働者となっている。さらに重要な点は、スラムが都心部(又は企業型経済)で生産された商品やサービスの大きな市場となっていることである。このようにスラムの経済は決して都心部の経済から分離された存在ではなく、経済的にも緊密な関連をもっていることが明らかである⁴⁹。したがって、都市の発展はスラムの存在なくしては考えられないことになり、またスラムを考慮に入れない都市政策は不完全なものとなる。

図4 途上国スラムの内部住民への順機能



以上のような経済的に重要な意味を有する他、社会的にもスラムは、過剰人口を吸収し、社会を安定化させる機能を有している。マッギー (McGee, T. G.) はこの点について〈バザール型経済〉は人口が増大しただけ物売りの数が増えてゆくごとく自己拡張的な性格を有していることや血縁関係者を1人でも多く雇用することが価値とされることなど、を指摘している。⁴⁷⁾

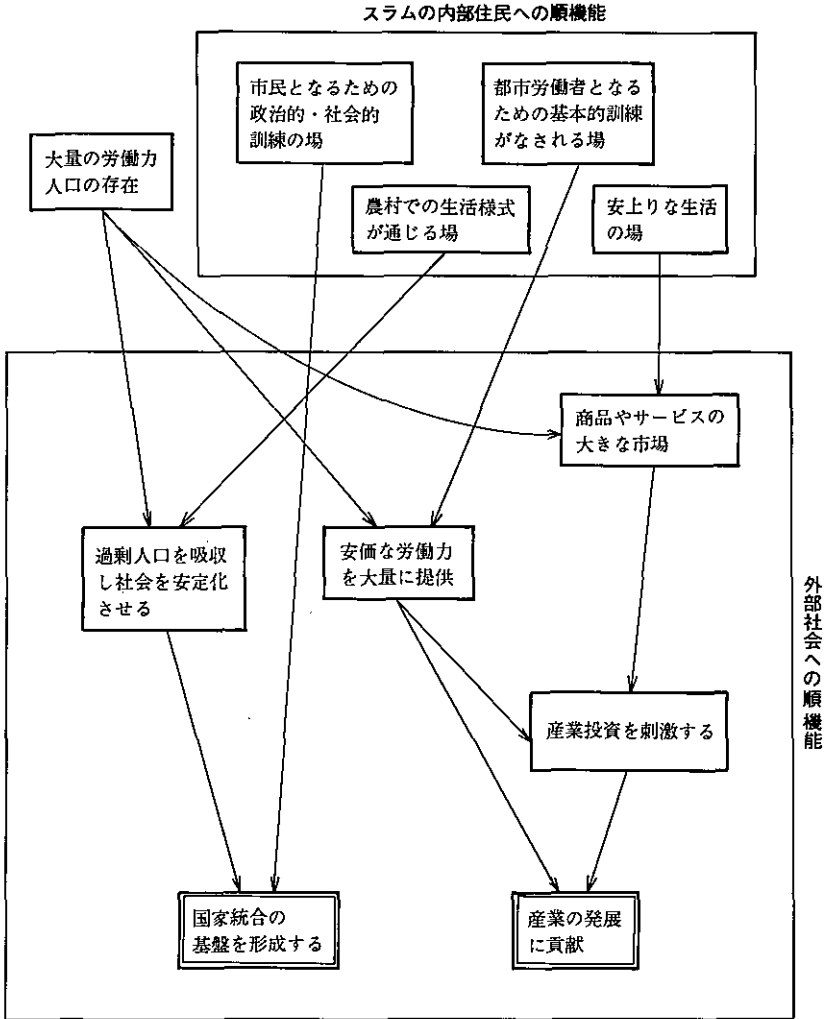
また“政治的訓練の場”でもあるスラムは、スラム・コミュニティの自己防衛のための政治活動のみならず、こうした体験を通じて国家統合の基盤となる社会意識にめざめた個人を形成する契機をつくり出す場ともなり得る。ラキヤン (Laquian, A. A.) はこの点について次のように述べている。「希望の見解かもしれないが、経済的・社会的状況が改善されれば、利己的で、偏狭な圧力団体から、より普遍性をもつ福祉指向的院外団体へと、組織の性格が変化してゆくであろう。また、リーダーの社会・経済的状況がよくなるにつれ、(政治家)への庇護・依存関係は稀薄化するであろう。おそらく、そうした関係にまで改善されるには、より高い教育を受けた次の世代までかかるであろう。また、スラムの生活環境が改善されるにしたがい、コミュニティの住民の関心は広がり、社会的に一層めざめてゆくことになる。このようにコミュニティが政治体制と関連をもち、その動きが発展してゆくと、やがては国民党を変化させるまでに影響力をもつこととなる。」⁴⁸⁾

以上の途上国スラムの外部社会への順機能の側面を図にまとめるならば図5のごとくになる。

また、途上国スラムの順機能的側面は1) 2) に述べたごとくであるが、両者の論点をまとめてみると以下のように整理することができよう。

- (1) スラムの順機能的な生活様式、すなわち都市適応のための訓練の場、としてスラムに身を置く人々は、都市に仕事を求めてやってきた意欲的な人々である。もちろんスラムに居住することは、彼等にとって一時的なことであり、仮り住いのつもりである。

図 5 途上国スラムの外部社会への順機能



- (2) スラムでは、安上りに生活ができ、親族や同郷出身者と生活することが可能なので心理的にも経済的にも快適な生活の場である。
- (3) 仕事も通常はスラムの中で手伝い仕事程度のもものが紹介される。そこでは都市労働者として必要な基本的訓練が行なわれる。
- (4) さらに、都市民になるための政治的・社会的訓練が、スラム撤廃反対運動などの政治活動を通じて行なわれる。
- (5) 以上のようなスラムを脱け出すための訓練がスラムの生活様式として内在しているというのが、スラムの内部住民への順機能の側面である。こうした訓練を受けたあとは、スラムを出ても十分生活してゆけるだけの“よき仕事”を手に入れるだけである。
- (6) 順機能的な側面が円滑に機能すれば、スラム流入者は、ある程度の滞在年月を経れば、必ずスラムを出てゆくことになるであろう。そしてスラムは常に新来者の集住の場となるか、あるいは、ついに全ての人々がスラムの訓練を受け“卒業”し、その結果スラムの存在自体が自然消滅してしまうかであろう。
- (7) しかし、実際には、スラムを卒業することが可能な人々の雇用の場が準備されていないこと、あるいは、雇用の場が創出される以上に急テンポにスラム人口が増えているのである。ここにスラム発生の基本的問題がある。
- (8) それにもかかわらず、途上国のスラムは、当該国の発展・統合に対して順機能となっている。すなわち①安価な労働力を大量に提供し、商品やサービスの市場になっていることにより産業投資を刺激し、経済発展の基盤を形成している。②過剰人口を吸収し、社会を安定化させることによって国家統合の基礎を形成しているのである。

3 逆機能と順機能との関連

すでにⅡ章で整理したごとく、スラムはその全てが逆機能的な存在で

あるわけではなく、又逆機能的スラムと順機能的スラムの両タイプがそれぞれ別個に並存しているわけでもない。むしろ、いかなるスラムも逆機能的な側面と順機能的な側面を有しているのである。それでは、その両者が一つのスラムの中で、どのように関連しているのであろうか。

この問題を考察するに際して、ここではまず、これまで検討してきた途上国のスラムの逆機能と順機能について単純化し、図に整理しておきたい。(図6参照) 図6より明確なごとく途上国のスラムの全般的な傾向については相反する二つの機能のどちらに比重が置かれているのか、一見ただけでは、判断しがたい。もちろん、各途上国により、どちらの傾向が強いスラムが多いのか状況はかなり異なるであろう。また、そうした傾向を判断するに足る十分な資料も整備されていない。しかしながら、相反する機能の両者が強調されていることは、かなり極端から極端までの多様なスラムが存在することを意味していると考えることができよう。したがって、今、仮に二つの要素の多様な組合せの可能性を考えてみれば、図7のように図式化することが可能であろう。(図7参照)

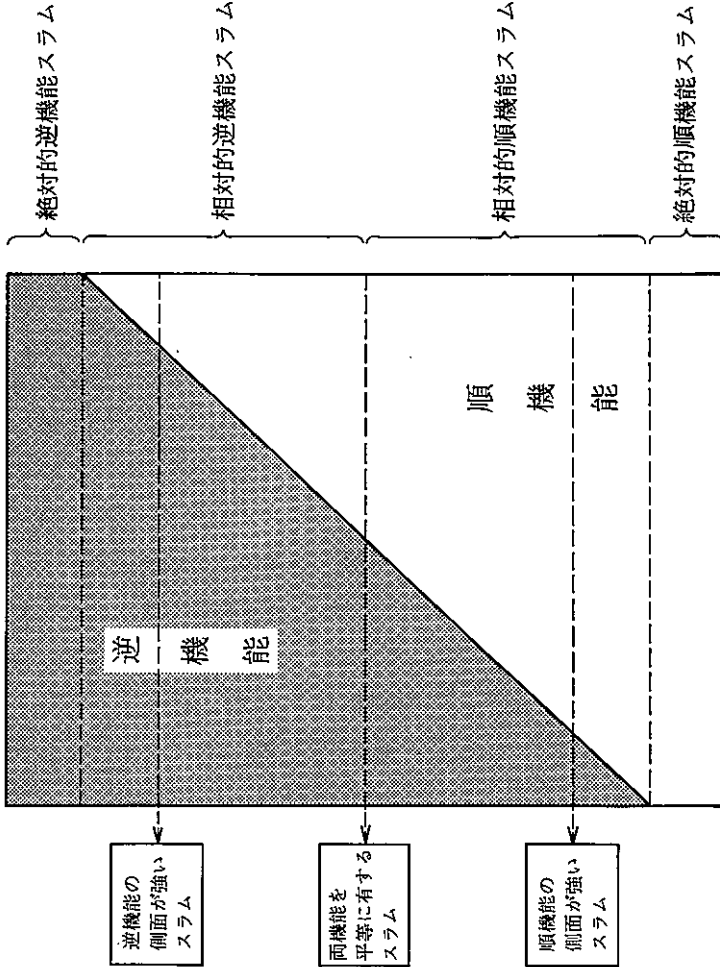
- (1) 〈絶対的逆機能スラム〉……このタイプのスラムにおいては、順機能が絶無である。モデルとしては考えられるが、現実にはこうしたスラムは存在しないであろう。
- (2) 〈相対的逆機能スラム〉……ほとんど順機能的要素がなきに等しいスラムから、順機能的要素が逆機能的要素に限りなく近い状況までのスラムがこのタイプに属する。つまり、両要素が必ず混在しているが、常に逆機能が優位するのがこのタイプのスラムである。
- (3) 〈相対的順機能スラム〉……(2)の逆で、常に順機能が逆機能に対して優位するのがこのタイプのスラムである。
- (4) 〈絶対的順機能スラム〉……(1)の逆で、逆機能が絶無のスラムである。モデルとしては存在しうるが、このように都市適応を助ける側面だけを備えたスラムは、スラムと呼びうるであろうか？

もちろん構造的に逆機能的な傾向が強いのか、順機能的側面が強いのか

図 6 途上国スラムの逆機能的側面と順機能的側面

	スラム内部の生活様式	スラムの外部社会への関連
逆機能的側面	<ul style="list-style-type: none"> ○〈貧困の文化〉は人々を無気力化させてしまう ○農村的ないしは伝統的な人間関係を強化し、意識の近代化を阻害する ○政治的にアパシーな人々をつくり出す ○子弟の教育程度を低下させる ○社会から除け者にされているという意識を植えつける 	<ul style="list-style-type: none"> ○〈規律ある労働者〉とはほど遠く、産業化の担手にはなり得ない ○産業化の推進役となる〈企業型経済〉の資本形成を阻害する ○伝統的な社会構造が温存強化されるため、近代化への社会変動が生じにくい ○反社会的な不満分子の集住の場となり、公権力の及ばない無法地帯となるため、都市の安全性と秩序の維持をおびやかす ○民族ごとに孤立化したスラムが形成されるため、国民統合の基盤が形成されにくい
順機能的側面	<ul style="list-style-type: none"> ○都市労働者となるための基本的な適応訓練がなされる場となっている ○市民となるための政治的・社会的訓練が行なわれる場となっている ○親族や同郷出身者が集住しており、農村的な生活様式が通じるため、心理的にも快適な生活の場である ○小量買い、信用買い等が可能で、安上りな生活ができる場でもある ○スラム内の結束も強く、安全な生活の場となっている 	<ul style="list-style-type: none"> ○安価な労働力を大量に供給する ○産業投資を刺激する ○〈企業型経済〉にとって生産物の消費地となっている ○他の場では不適応な人々を受入れ、またゆるぎされていないモノやサービスを提供し、都市の安定化に役立っている ○〈バザール型経済〉は大量の人口吸収機能を有する ○国民的統合の基盤をつくりあげる

図7 逆機能と順機能の組合せ



かを判断するための指標をどのように設定するのかについてはかなり困難な問題がある。しかしながらこうした図式をたよりにしつつ、たとえば、当該スラムはどちらのタイプの居住者(逆機能により無気力化したメンバーと順機能により、より適応的になっているメンバーのどちら)が多いのか、とか、どちらのタイプの家族が多いのかといった指標を手がかりとして、スラムを位置づけてゆくことが可能となろう。このようにして、実証的なデータを積み重ねてゆくことにより、現状におけるスラムはどちらの機能が強いのかとか、各国別にどのような相違があるかといった傾向が明確化されるであろう。

ラキヤンは、スラムを都市の中心部に立地し、その歴史も古いスラムと周辺部に立地し、近年になって形成されたスラムとに分類している⁶⁹。前者のスラムの特質として、物理的荒廃のひどさ、過度の密集状況、ひどいコミュニティの解体状況、政治的無関心、社会的孤立化、等をあげている。他方、周辺部のスラムは、物理的荒廃もさほどひどくなく、密集状況も中心部ほどひどくなく、コミュニティの結束の程度も高いことを指摘している。前者のスラムの特質は、これまで整理してきた、逆機能的スラムの特質を備えており、後者は、順機能的スラムの特質を備えている。すなわち、スラムは、歴史的に古くなる程、スラムを脱しきれなかった人々が吹き溜り、逆機能的な側面が強くなること、又そうしたスラムは都市の拡大と共に中心部に残存する傾向があることを意味しているとみることができよう。他方、比較的近年に形成されたスラムは、成員も新しく、いまだ希望に満ち、ここから脱することを考え、努力している。こうしたスラムは当然のことながら順機能的な側面が強くなり、又その立地は都市の周辺部の未利用地になる傾向があるものと思われる。このように逆機能的スラムと、順機能的スラムとの差異を規定する要因は時間であり、又付随的に、立地も規定されることになることを意味していると言えよう。

以上のような要因を考慮に入れた場合、途上国における大多数のスラ

ムはいまだ歴史も浅く、途上国側の研究者の多くが指摘しているごとく、順機能的側面がより強いものと思われる。また途上国のスラムの場合、その人口も膨大で都市の全体人口の1/3に達するほどであるところから、一般的にスラム居住者がいだと考えられているマージナリティ意識も低いようである。つまり、途上国の場合、スラム以外の一般的生活水準もすでに低いところから、住民は必ずしも悲惨な場所といった実感を持っていない。現にスラムの生活自体、農村の生活水準よりかなり良いと考える人々が多いのである。⁵¹ただし、スラムでの生活が次第に長期化するにしたがい、“ヤル気”を失なってゆくことも明らかである。しかも多くのこれまでの研究結果によると、“ヤル気のなさ”は一挙に全生活態度に表われるのではなく、ある時、ある場面では“ヤル気を出し”他の場面では“ヤル気のなさ”が顕在化するというように、二つの異なった態度が一個人の中に並存し、次第に“ヤル気のなさ”が全生活態度に広がってゆく傾向にあることを示唆している。⁵²すなわち、スラムの逆機能的側面によって影響された態度と順機能的側面によって影響を受けた態度とが一個人に内面化され並存しつつ次第に前者の影響の側面が強くなり、生活態度は悪化の一途をたどるといったプロセスをへて、ついには全生活態度が逆機能的側面の影響下に置かれるようになってゆくことがわかる。こうした逆機能的側面による影響下に置かれてゆくメンバーが増大するにつれ、スラムの性格自体も次第に逆機能的側面が強化されてゆくことになろう。

また、歴史も浅く、個人にとって順機能的側面が強い途上国のスラムは、外部社会に対しても順機能的な側面が強いものと思われる。すなわち、居住者が労働意欲の旺盛な人々であるという事実は、安価な労働力が豊富であり、産業投資を誘発させることになるからである。ただし、この労働力に対応して、雇用の場が創出されないことは、きわめて問題である。しかし、雇用が創出されないのはスラムの側の問題ではない。産業政策の問題であり、産業界の問題である。また過度に人口が都市に

流入するものも、スラムの側の問題ではなく、農業や農村開発の問題である。あるいは人口問題である。スラムはむしろ、こうした社会的背景から生じた過剰人口を吸収し、社会を安定化させていると言えるのである。このように考えてゆくと、いわゆるスラムの問題として指摘されている経済発展や国家統合の阻害因としての側面は、本来、スラム自体の問題ではなく、むしろスラム以外のところに真の原因があると言えよう。ただし、すでに述べたごとく、スラムの存在自体が長期化するにしたがい、次第にスラムの内部の居住者も無気力化し、それにつれて、労働意欲も低下し、労働者としては使いものにならない人々が増大してゆくものと思われる。

以上、ここでは逆機能と順機能との関連について述べてきたが、論点を簡単に整理すると以下のごとくになる。

- (1) スラムには、逆機能と順機能がどのスラムにも並存していると考えられるが、モデルとしては、①絶対的逆機能スラム(順機能=0)、②相対的逆機能スラム(逆機能>順機能)③相対的順機能スラム(逆機能<順機能)④絶対的順機能スラム(逆機能=0)等が考えられる。
- (2) スラムは時間的(歴史的)経過とともに内部住民に対する逆機能的要素が強化される傾向がある。これは、住民自身、経済的貧困から脱しきれない状況が長期化すると次第に無気力化し、しかもその無気力化した生活様式が流入者や、次の世代にまで伝達されるからである。
- (3) しかも都市の拡大とともにこうしたスラムは、相対的に都市内の比較的的中心部に立地することになってしまう。それに対し、新しいスラムは、都市周辺の未利用地に立地する傾向にある。
- (4) (2)(3)の傾向を考慮に入れると、途上国のスラムは内部住民に対して<相対的順機能スラム>であると言うことが可能であろう。
- (5) また、外部社会に対しても<相対的順機能スラム>の傾向が強いものと考えられる。

IV 結 語

途上国のスラム研究は、いまだ、体系的に整理されておらず、各国の代表的なスラムの実態に関する調査レポートが散在している状況にある。このようなスラム研究の現状から、ある程度、一般的傾向として明確化されてきていることは、これら途上国のスラムがどのような社会的背景から形成されてきたかということである。ただし、形成されたスラムが当該途上国都市、及び当該国全体の統合や発展にとって、どのような意味を持つ存在となってきたかについては、論者によってその見解はきわめて異っている。本稿では、そうした途上国スラムに関する〈対立議論〉や〈類型論〉を批判の対象としつつ、現状におけるスラムを機能的に整理した。こうした機能的整理を通じて、途上国のスラムについては以下のような傾向があることが明確化された。

- (1) 途上国のスラムは、その多くが形成されてから歴史も浅く、スラム居住者にとって都市適応のための媒介機能の側面、すなわち順機能的な側面が相対的に強い。このように順機能的側面が強いのは、居住者の多くが、農村から移動してきた人々だからであり、しかもこの傾向は今日に至っても強く、引続き、スラム数も人口数も増加しているのである。また大戦後形成されたスラムがほとんどであるため、現在、古いスラムでも第二世代の時代にある。
- (2) スラム居住者にとってのみならず、途上国のスラムは途上国都市や国家全体の発展・統合にとっても相対的に順機能となっている。一般的に指摘されているバザール型経済の資本形成阻害要因としての側面や、民族ごとに孤立化した状況が作り出す伝統的社会構造の温存と近代化の阻害・国民統合基盤の阻害等の問題点は、スラム自身の持つ構造原理に起因するのではない。工業発展のおくれや人口問題の結果がスラムの増大やバザール型経済の拡大の原因となっている。むしろ、スラムは、そうした人口をうまく吸収する“ショック・アブソーバー”の機能をはたしていると言い得るであろう。

以上のような途上国スラムの現状を念頭に置いた時、以下のような基本的考慮の必要性が想起されるであろう。

- (1) スラムは歴史的経過とともに逆機能的側面が強くなってゆく傾向があるため、なるべく早期に解決の方途を考えてゆく必要がある。
- (2) スラム問題の基本的原因は、農業政策、工業政策、人口政策等の問題であるところから、長期的にはこの点からの検討が意識されなければならない。
- (3) 現在、途上国のスラムには内在的に都市適応を助ける機能があるが、この側面をさらに強化するための諸政策が検討される必要があらう。
- (4) 他方、住民を無気力化させてしまう逆機能の側面を抑制するために、スラム住民がスラム環境自体を、物理的、社会的(教育、コミュニティ活動など)に改善してゆく活動を許容するとともに、むしろうまく指導してゆく必要があらう。すなわち、住民の現状の生活意欲を活性化させていく努力が必要とされよう。

(1979年12月)

注

- (1) 本稿における途上国は、主に南アジア地域(東南アジア10ヶ国及びインド、パキスタン、バングラディッシュ、スリランカ、ネパールを加えた15ヶ国)を想定しているが、参考として、南米やアフリカのケースなども念頭に置いている。
- (2) 〈過剰都市化〉(over-urbanization)の概念が途上国都市化論において共有される知識となったきっかけは、次の論文である。Davis, Kingsley and H. H. Golden, "Urbanization and Development of Preindustrial Areas," *Economic Development and Cultural Change*, Vol. 3, October, 1955.
また、同様な現象についてマッキー (McGee, T. G., *The Southeast Asian City: A Social Geographical of the Primate Cities of Southeast Asia*, London: G. Bell and Sons, 1967, p. 17) は〈疑似都市化〉(pseudo urbanization)と呼び、フリードマンとラッキングトン (Friedman, John and Thomas Lackington, "Hyperurbanization and National Development in Chile: Some Hypotheses," *Urban Affairs Quarterly*, Vol. 2, June, 1967, pp. 3-29) は〈超過都市化〉(hyperurbanization)と呼んだ。
- (3) 〈首位都市〉とは、二位、三位にランクづけられる人口規模の都市に比較して隔絶した規模を有する大都市に対して名づけられる。発展途上国においては、こうした隔絶たる規模をほこる大都市が、全体社会に君臨し、政治、経済、文化的支配の中核となり、中小都市の発展がおくれていることが指摘されている。(新津晃一「南アジアにおける向都移動者の都市対応様式」特集アジア社会の近代化、『社会学評論』No. 94, 第24巻2号, 1973, pp. 35-37.)
- (4) Department of Economic and Social Affairs, *Improvement of Slums and Uncontrolled Settlements*, United Nations, New York, 1971, p. 23.
- (5) インドにおけるスラムの歴史は古く, "bustees"の他にも "jompris" "juggies" "ahatas" "cheris" "katras" "chawls" "lanes"等のスラムに類する現地語がある。(Marshall B. Clinard, *Slums and Community Development*, Free Press, 1966, p. 75)。
- (6) ブラジルにおいても, favelasのほか, "macambos" "algados" "vilas de malocas"等のスラムを意味する現地語がある。(Clinard, M. B., *op. cit.*)
- (7) 都市の農村化とは一般に次のような意味あいを有する。①都市人口に占める農村からの都市流入人口比率は増加している。②向都移動者は出身地の民族, 人種別に都市の中に集住する傾向があり, しかも出身農村とのゆききは比較的活発であるため, 都市的生活様式が身につかない, ②については, 新津晃一「南アジアにおける向都移動者とその定着様式」, 林武編『発展途上国の都市化』アジア経済研究所, 1976, pp. 170-175), ③都市における経済的にきびしい生活環境は相互扶助的結束を高め, またそのような結束を強化する必要性があるため, 農村で生活していた時以上に伝統的な儀礼や習慣が重んじられることすらある。(③については, Mitchell, J. C., "Theoretical Orientations in African Ur-

- ban Studies,” in Banton, M. (ed), *The Social Anthropology of Complex Societies*, London: Tavistock, 1966)。
- (8) 都市内における複合的民族集団がそれぞれに孤立化し、相互に共通の政治的、社会的関心にもとづくイデオロギー集団を形成しにくくしている状況を、N. K. ボースは〈未成熟の都市化〉(premature urbanization)と称した。(Bose, N. K., *Calcutta 1964 A Social Survey*, Bombay, 1968, pp. 66~68.)。
- (9) McGee, T. G., “Catalysts or Cancers?: The Role of Cities in Asian Society,” in Jakobson, Leo and Ved Prakash (eds.), *Urbanization and National Development*, Sage Publications, 1971, pp. 157 ~ 181.
- (10) Sovani, N. V., *Urbanization and Urban India*, Asia Publishing House, 1966, pp. 144 ~ 146.
- (11) 新津, 前掲論文, 1976, pp. 151~155.
- (12) Mera, Koichi, “On the Concentration of Urbanization and Economic Efficiency,” *Economics Department Working Paper No. 74* (Washington, D. C.: IBRD, 1970) pp. 27 ~ 28.
- (13) Mangin, William, “Latin American Squatter Settlements: A Problem and a Solution,” *Latin American Research Review*, Vol. II, No. 3, Summer, 1967, pp. 74 ~ 78.
- (14) Brookfield, Harold, *Interdependent Development*, London: Methuen, 1975.
- (15) Laquian, Aprodicia A., “Slums and Squatters in South and Southeast Asia,” in Jakobson, Leo and Ved Prakash (eds.), *op. cit.*, pp. 183 ~ 203.
- (16) Eric Partridge, *Origins, A Short Etymological Dictionary of Modern English*, New York: The Macmillan Co., 1958.
- (17) Hunter, David R., *The Slums: Challenge and Response*, New York: The Free Press, 1964, p. 5.
- (18) Ford, James, *Slums and Housing: History, Conditions, Policy*, Cambridge: Harvard University Press, 1936, p. 11.
- (19) United Nations, *Urban Land Policies*, Document ST/SCA/9, New York: UN Secretariat, 1952, p. 200.
- (20) Clinard, M. B., A Paper Reported in the Sixth Rehovot Conference in Raanan Weitz (ed.), *Urbanization and the Developing Countries: Report on the Sixth Rehovot Conference*, p. 260.
- (21) *Ibid.*
- (22) Lewis, Oscar, *A Study of Slum Culture: Backgrounds for La Vida*, Random House, 1968, pp. 3 ~ 21.
- (23) 途上国のスラムに関するいわば肯定的見解は、以下の研究者にみられる。① インドについては、Sovani, N. V., *op. cit.*; Bose, A., *Urbanization in India*,

- Academic Book Limited, 1970; Zachariah, K. C., *Migrants to Great Bombay*, Asia Publishing House, 1968. 等である。②フィリピンについては, Laquian, A. A., *Slums are for People*, East-west Center Press, 1971; Hollnsteiner, Mary R., "Tondo as a way of life," 等である。③途上国以外の研究者については, Howton, F. W., "Cities, Slums and Acculturative Process in Developing Countries," in Meadows, P. and E. H. Mizruchi (eds.), *Urbanism, Urbanization, and Change: Comparative Perspectives*, 1969.
- (24) Stokes, Charles, "A Theory of Slums," *Land Economics*, Vol. 48, No. 3, August, 1962, pp 187 ~ 97.
- (25) Gars, Herbert, "The Urban Villagers," New York: The Free Press of Glencoe, 1962.
- (26) Frankhenhoff, Charles A., "Elements of an Economic Model for Slums in a Developing Economy," *Economic Development and Cultural Change*, Vol. 16, No. 1, pp. 27 ~ 35.
- (27) Seeley, John R., "The Slum: Its Nature, Use, and Users," *Journal of the American Institute of Planners*, Vol. 25, No. 1, February, 1959.
- (28) Laquian, A. A., *op. cit.*, pp. 185 ~ 6.
- (29) Lewis, Oscar, "The Culture of Poverty," *Anthropological Essays*, New York, Random House, 1970, pp. 71 ~ 74.
- (30) Roberts, Bryan, *Cities of Peasants: The Political Economy of Urbanization in the Third World*, London: Arnold, 1978.
- (31) *Ibid.*, p. 70.
- (32) Jesus, Carolina Maria de, *Child of the Dark*, New York: Signet/E. P. Dutton, 1963.
- (33) Bose, N. K., *op. cit.*
- (34) マッギー (McGee, T. G., *op. cit.*, 1971, pp. 166~174) は途上国都市の経済的重構造を, ギャーツ (Geertz, C.) にならって〈バザール型経済〉と〈企業資本型経済〉の概念を援用し分析を進めている。ギャーツによれば, 〈企業型経済〉は, 「商業あるいは産業活動がある特定の生産ないしは分配目的という観点から多様に専門化された職務を組織化しているインパーソナルに規定された社会制度によって遂行される」のに対し, 〈バザール型経済〉は「非常に多量な諸種の交換行為によって関連しあっている相互にきわめて競合的な商品取引者の活動によって成立している。」と述べている。(Geertz, Clifford, *Peddlers and Princes: Social Change and Economic Modernization in Two Indonesian Towns*, Chicago, 1963, pp. 28~29)。
- (35) McGee, T. G., *op. cit.*, 1971, p. 173.
- (36) Hoselitz, Bert F., "The Role of Cities in the Economic Development of Underdeveloped Countries," in Hoselitz (ed.), *Sociolo-*

- gical Aspect of Economic Growth*, 1960, pp. 185 ~ 215.
- (37) Howton, F. William, *op. cit.*, p. 407.
- (38) Beals, Ralph L., "Urbanism, Urbanization and Acculturation," *American Anthoropologist*, Vol. 53, 1951, pp. 1 ~ 10.
- (39) 向都移動者の職業生活への適応過程については、新津, 前掲論文, 1973, pp. 43 ~ 44, 参照。
- (40) 都市の中では、ある特殊の職業が、特定の民族集団によって占められていることもしばしば見受けられる。
- (41) Laquian, A. A., *op. cit.*, p. 197.
- (42) *Ibid.*, pp. 195 ~ 196.
- (43) Hollnsteiner, Mary R. & Maria Elena Lopez, "Manila: The Face of Poverty," in Social Science Research Institute, I. C. U. (ed.), *Asia Urbanizing: Population Growth & Concentration & the Problems Thereof*, The Simal Press, 1976, pp. 77~78. なお、フィリピンでは、このような小量販売を "*takal and tingi system*" と呼んでいることが示されている。
- (44) *Ibid.*, pp. 82 ~ 83.
- (45) Roberts, Bryan, *op. cit.*, p. 10.
- (46) Frankenhoff, C. A., *op. cit.*
- (47) McGee, T. G., *op. cit.*, pp. 157 ~ 181.
- (48) Laquian, *op. cit.*, pp. 199 ~ 200.
- (49) スラムの個人に対する逆機能の側面が強化され、無気力化したメンバーが増大することは、スラムの存続・拡大という観点から見れば、順機能化と考えることが出来る。したがって、スラムが流入者のための都市適応を助ける場となっているという側面、すなわち自からスラムを脱する方法を教え込む場としての側面は、個人にとっては順機能であると言えるが、スラムの存続にとっては逆機能の側面であるということになろう。このように考えると、スラム成立の基本的要件は、個人を無気力化させる逆機能であり、途上国に特に顕著に見られる順機能の側面は、スラムの存続にとっては付加的ないしは副次的機能であるとともに、スラムをついには解消させてしまう逆機能の側面であるとも言えよう。
- (50) *Ibid.*, pp. 185 ~ 187.
- (51) Hollnsteiner, Mary R. & Maria Elena Lopez, *op. cit.*, pp. 82 ~ 83.
- (52) 新津, 前掲論文, 1973, pp. 44~46.

THE FUNCTION OF SLUMS IN THE PRIMATE CITY
OF THE DEVELOPING COUNTRIES

— Two Types of Contradicting Theories Reviewed —

《 Summary 》

Koichi Niitsu

The slums and squatters in developing countries is considered to be “a big social problem” especially in primate cities. Though this view is generally supported by researchers, the empirical studies conducted mostly by Asian scholars suggest that the slums (and squatters) in Asian primate cities does not necessarily mean dysfunctional for the development of the given societies as well as for the adaptation of migrants to the cities. While there are two conflicting views — dysfunctional view vs. enfunctional view, some researchers identifies two different types of slums — dysfunctional type and enfunctional type — making the distinction between “slums of despair” and “slums of hope”, “dead-end” and “open-end” slums, “urban jungle” and “entry area”, etc.

In this paper, the author analyzes these discussions and suggests that it is appropriate to consider two different factors — dysfunctional and enfunctional — to be identified in any slums and therefore the important problem is to consider which factor is more dominant in a given slum or slums of a given city. Settling up the analytical framework of a slum, the both dysfunctional and enfunctional factors of the slums in the present developing countries were generally discussed. Through these discussions, the author clarifies the functional characteristics of slums in the developing countries.